木津川における
グループ河川レンジャーの活動展開
～大学生が取り組む地域連携～

小林　慧人[1]・山村　武正[2]

[1] 同志社大学　理工学部　環境システム学科　（〒610-0394 京都府京田辺市多々羅都谷1-3）

[2] 淀川管内河川レンジャーアドバイザー　（〒573-0056 大阪府枚方市桜町 3-32）

2014 年度に発足した「木津川グループ河川レンジャー」は，河川レンジャーアドバイザー1 名と大学生 2 名によって構成される団体であり，木津川流域で地域連携活動を行っている．地域住民が木津川の魅力に触れる機会が少なく，特に子どもたちにとっての原体験が少ないことを現状と捉え，参加者が木津川の自然に親しむことのできる活動を多く展開してきた．本稿では，大学生が地域連携活動に取り組む中で浮かび上がった成果および課題について考察し，今後の展望を述べる．本活動は，大学生が自然環境を通し，地域に対して行う参画活動の一事例として，全国に発信していけるものである．

キーワード　大学生，グループ河川レンジャー，地域連携

1.　はじめに

河川レンジャー制度は，2003 年度に淀川水系流域委員会による提言を受け，住民等の参加による河川管理を目指して推進されている事業である．2009 年度に策定された淀川水系河川整備計画では，河川レンジャーを「人と川のつながり」を推進する事業と位置づけている．河川レンジャーは，住民等と行政との間に介在し，川と人，人と人とをつなぐ主体として，それぞれの個性と特性を活かし，2003 年度よりそれぞれのフィールドで活動をしてきた．

制度発足以来およそ 10 年が経過する中，河川レンジャーは 50 代，60 代の人材が中心となっていたことから，より若い世代のレンジャーによる新しい視点での活動が求められるようになってきていた．と同時に，地域連携活動等の経験が浅い若年層をサポートし，活動を進めるための仕組みが求められた。

このような経緯を経て，2011 年度に個人でなく団体で河川レンジャーとして活動するグループ河川レンジャー（以下，G レンジャー）の導入が検討され始め，2012 年度の第 7 回代表者会議において G レンジャーの取り組みの試行が承認された．G レンジャーは，大学生の「若い力」により，現行の河川レンジャー活動の継続および発展だけでなく，これまでとは違った視点を持ち新たな活動を行うなど，河川レンジャーの更なる充実を図ることを目的としてスタートした．

G レンジャーの形式には 2 つのパターンがあり(図-1)，木津川グループ河川レンジャー（以下，木津川 G レンジャー）は大学生と河川レンジャーアドバイザー（以下，RA）から構成される．全国的にみても，このような体制で活動すること自体が珍しく，今後大学生が地域に出て活動する上での先駆的事例になりうる団体である．G レンジャーは，専門分野の異なる大学生が複数集まることで，活動において参加者に対してより幅広い分野の話題を提供できるという強みを持つ．

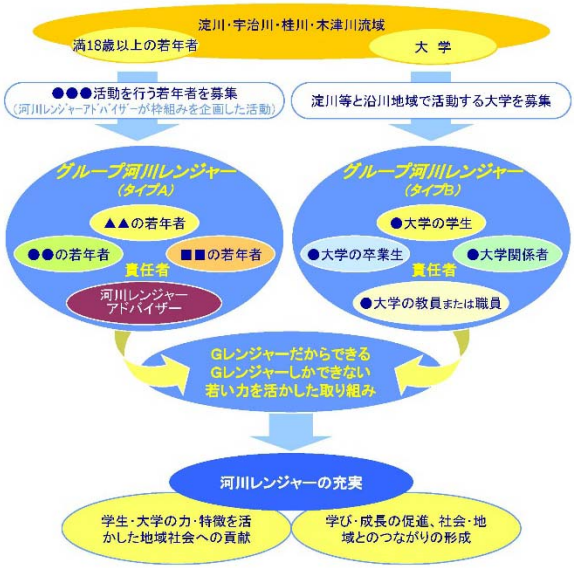

図-1　G レンジャーの概念図

2. 木津川グループ河川レンジャーとは

(1) 木津川グループ河川レンジャーの結成

木津川Gレンジャーは，木津川管内河川レンジャーを7年経験し，現在はRAである山村，同志社大学理工学部に所属する小林，さらに滋賀県立大学環境科学部に所属する北野が集まり発足した.

山村は人々が川から離れている現状に危機感を持っており，この現状を打開するため，同じ方向を向く人を集めたい一心であった．特に，将来的に全国各地へ拡散する大学生と共に活動したい思いが強かった．地域での活動を通して大学生の間に原体験を積む，もしくは子どもたちに原体験の場を作る側に立って欲しいと考えていた．メンバーとなる大学生には，まずは自らが木津川に愛着を持ってもらうことを期待し，この段階を乗り越えられるかが一つの課題になると考えた.自らで企画する活動に自信を持ち，地域に対して堂々と活動をPRするために必要な過程であるからだ.

一方で大学生は，自らの知識や経験の不足を自覚していたため，他人に対して川の魅力を知るきっかけを作る活動が行えるのかという不安があった．しかし，山村の考え方に賛同し，全国的に類例を見ないGレンジャーの立ち上げを決心した．以前から木津川を知りたい気持ちがあった学生メンバーにとって，普段の大学生活では経験できないことが多いことは魅力的であった．少しでも多くの子どもたちに刺激を与え，かつ自己成長したい思いでいた.

そして，2013年度の第11回代表者会議においてGレンジャーの活動計画書を提出した．代表者会議の確認により山村，小林，北野の3名が木津川Gレンジャーとして任命された（写真-1）.

写真-1　木津川Gレンジャー2014年度メンバー

(2) 木津川の現状と課題および活動目標

計画書を作成する段階で，活動経験のない学生が木津川の現状と課題を考えた．RAのアドバイスのもと，木津川Gレンジャーが挙げた現状と課題は，「多くの人にとって川はただ流れているものであり，普段の生活から切り離れたものとして認識されている．学校やメディアでは，川の危険な面が教育され，強調され，流域で暮らしていても川に近づく機会がほとんどない.川に対して愛着を持ちにくい現状がある．つまり，川の魅力に触れる機会が少なく，それは特に子どもたちにとって顕著であり，原体験の機会が少ない原因の一つになっている．これらを克服することが課題である」であった．これに対し，1年目は以下に示す3つの目標を立てた.

まず1つ目は，「京田辺市の小中高校生，および大学生を活動に呼び込むこと」とし，2つ目は「メンバーの知識や経験をフル活用し，工夫を凝らした活動を行うこと」とした．そして3つ目は，「前例のない活動を行うにあたり，学生らしくチャレンジ精神を持ち，活動計画を立てること」とした.

3. 2014年度の活動

2014年度，木津川Gレンジャーは12回の活動を行った（表-1）．活動は，5回の独自活動と7回の連携活動に大別される．独自活動とは，活動内容の計画段階から活動運営に至るまで学生が主体となる活動のことである．連携活動とは，RAがこれまで行ってきた活動に学生が入ることで，その内容をより発展，充実させた活動のことである．各活動には，フィールドでの活動を楽しむ「遊び」の要素と，活動を通して新しいことを発見する「学び」の要素を盛り込んだ．大学で学び，得意とする分野が活動内容に活かされるよう，陸域の昆虫や植物では小林が，水域の生物では北野が，木津川の歴史的および文化的側面では山村RAが中心となり，活動を展開した.

表-1　2014年度Gレンジャー活動状況

種別	活動日	活動名	参加者数	内容
独自活動	2014/5/10	木津川1日探検	16名	木津川の自然観察，素敵なところの発見し、絵に残す
	2014/6/1	木津川クリーンウォーク	14名	堤防のゴミ拾い，木津川の生き物や歴史について勉強
	2014/7/20	馬坂川水路調査	6名	天井川についての学習，生息する生物調査
	2014/8/10	木津川1日探検	217名	木津川の自然観察，素敵なところの発見し、絵に残す
	2014/10/18	外来魚駆除し隊	30名	外来生物についての学習，釣りによる駆除活動
連携活動	2014/4/12	春の野草観察会	20名	植物の専門家と春の野草を観察
	2014/6/15	木津川クリーンアップ	6名	木津川河川レンジャーが協力，木津川全体の生息活動
	2014/6/22	木津川親子で遊ぼう・学ぼう魚とり	182名	木津川河川レンジャーが協力，タモ網による魚とり，水質調査
	2014/7/6	親子自然観察会	23名	昆虫を中心とした生き物観察
	2014/8/3	木津川親子で遊ぼう・学ぼう魚とり	217名	木津川河川レンジャーが協力，タモ網による魚とり，水質調査
	2014/10/4	木津川一斉水ウォッチング	21名	木津川河川レンジャーが協力，木津川全体の水質調査
	2015/2/21	木津川展	256名	木津川河川レンジャーが協力，木津川流域活動団体との交流

(1) 独自活動とその結果（一部を紹介）

a) 木津川1日探検

2014年5月10日に「木津川1日探検」という活動を行った．本活動では，河川敷に生息する昆虫や植物および川の生き物の観察以外にも，「渡しの碑」など歴史的側面や，地域住民が長年続けてきた希少植物保全の現状を解説した．木津川の様子を河川敷堤防や河原，川の中から観察する過程で，木津川を肌で感じてもらうという狙いがあった．活動の最後には，活動を通じて感じられた木津川の「素敵」なところを，絵や言葉で表現した（写真-2）．

本活動はGレンジャーにとって初めての独自活動であった．使用する会館の予約，チラシ作成等の広報活動，当日必要になる資料の作成，ライフジャケット等の必要物品手配など，準備すべてを学生メンバーで行った．活動当日は，参加者が集まるか等の懸念があったが，各メンバーの的確な協力によりほぼ計画通りの活動を展開することができた．また，本活動は新聞社から取材があった（図-2）．活動当日の取材を通し，Gレンジャーには臨機応変に対処する力が求められ，大学生が川に子どもたちを集め活動すること自体が目新しく，注目されることを知った．

b) 外来魚駆除し隊

2014年10月18日に「外来魚駆除し隊」という活動を行った．本活動では，京田辺市内の池で外来魚を実際に釣ることで外来魚の生息状況を知り，解剖し観察することで外来魚が日本の生物に与える影響を学べる内容を展開した（写真-3）．このことから，外来生物駆除の必要性や外来生物をどう扱っていくべきかを参加者自らが考え，外来生物に対する知識を深められる機会となるようにした．また，池を周回し，池から流れ出る天井川の説明や，池の周りに生息している外来植物および昆虫の説明をした．

本活動では，地元の若者に参加して欲しいという強い思いのもと，広報活動に重点を置き，市内の小中高校に手渡しでチラシを配り回った．その成果として，これまでにはなかった高校生の参加を得た．

写真-2 「木津川1日探検」で木津川の素敵を絵に！

(2) 連携活動とその結果（一部を紹介）

2014年6月22日および8月3日に「木津川親子で遊ぼう・学ぼう魚とり」という活動を行った．本活動は地元のNPO団体と河川レンジャーの共同で行ったものであり，各活動への参加者は100名を超えた．Gレンジャーは，学生スタッフの統制や生き物とりの指導，参加者の安全監視，生き物クイズの出題，投網実演を行った．生き物クイズでは，各メンバーが大学で学んでいる分野からの内容を考えた．魚や水生昆虫の名前の由来，足裏にいる土壌動物の数の問題というように，メンバーの知識を活かしたものとなった．

また，大学生がレンジャー活動を行うことで，大学生が活動スタッフとして集まった．集まった大学生の多くはこれまでに木津川で遊んだことがなく，「地域の活動に参加し，子どもたちといっしょに遊び，子どもたちが川の中で純粋に楽しんでいる姿を見て嬉しくなった」と充実感を口にしていた．

洛南タイムス

自然の魅力、触れて

木津川グループ河川レンジャー

同大学生ら初企画

1日探検で川辺散策

生き物や植物観察、楽しむ

人の手で森づくり

森林整備で社内交流

地域で暮らす支え合いの輪

写真-3「木津川1日探検」の報道記事　洛南タイムス 2014.5.11

図-2　「外来魚駆除し隊」で解剖体験をする参加者

4. 活動を通してみえた成果と課題

(1) 成果

木津川というフィールドをほとんど知らない大学生メンバーが木津川に愛着を持ち，木津川流域を自分たちのフィールドとし，活動をやり通すことができた．

普段の生活で他の河川を見る時，無意識に木津川と比較してどのような特性があるか捉えており，木津川が河川を見る「ものさし」となっている．

また，活動を実施する中で，地域のNPO団体や保護者および地域の子どもたちとの関わり合いを深め，地域の河川の問題を地域の人々とともに解決していこうという姿勢を形作ったことが成果である．

活動に参加したり，活動を共同で開催したりした地域の人からは，「ありがとう」や「助かった」という言葉をかけてもらい，保護者からは「Gレンジャーの活動に参加してよかった」「河川に入るのは初めてであり，これからは子どもとともに遊びに来たい」「これまでは河川に行くことを禁止していたが，これからは母である私も一緒に自然と関わる機会を持ちたい」などの感想をいただいた．また子どもたちからは，「楽しかった」「おもしろかった」だけでなく，大学生が関わることで，「なかなか大学生と遊んだりする機会がなかったので，とても良かったです．国土交通省に入りたいです．大学生になっても，虫や魚のけんきゅうをしたいです．大学生が来てくれるようになって，とあみをさせてもらったり，生き物のことを教えてくれたりして，毎回行きたくなって，参加する回数もふえました」という意見をいただいた．これらから，大学生が子どもたちの将来への具体的な目標になる，ということもアンケートから学ぶことができた．年齢の近い大学生との活動でなければ，今回のように，子どもたちの将来への展望につながるアンケートは出てこなかったと考える．

河川との関わりが薄くなった20代から30代の保護者や，河川は危ないと感じている子どもたちにとって，木津川Gレンジャーの活動は意識を変える良い機会となった．また，100人を超える参加者のあった活動では，地域の人々が次世代に対して自分たちの活動を伝える意識が高まったといえる．

最後となるが，木津川Gレンジャーはその目新しさから，広報だけでなく活動当日に取材を受け，紙面で取り上げられることが多かった．これらの結果を表-2にまとめている．また，2015年6月5日付けで発行された「生物多様性わかもの白書vol.1」のコラムで紹介された（図-3）．さらに，「国連生物多様性の10年」中間年に向けたキックフォーラムにおいては若手セクターとして参加を果たしただけでなく，ヒアリングを受ける機会を得た．これらは，大学生が地域と行政と関わりながら地域連携活動をする木津川Gレンジャーの新しい取り組みが，世間にも認められたからである．

表-2　Gレンジャー活動における新聞への掲載状況

掲載日	新聞社	記事名	内容
2014/5/8	毎日新聞	-	木津川1日探検（2014/5/10）の広報．約140字
2014/5/8	朝日新聞	-	木津川1日探検の広報．約170字
2014/5/9	洛南タイムス	1日探検、素敵を残そう	木津川1日探検の広報．約650字
2014/5/11	洛南タイムス	自然の魅力、触れて	木津川1日探検の活動内容について．約1000字
2014/5/11	京都新聞	木津川の自然に触れる	木津川1日探検の活動内容について．約300字
2014/6/1	朝日新聞	-	木津川クリーンウォークの広報．約140字
2014/6/15	京都新聞	青少年に川の魅力発信	小林による，木津川Gレンジャーとその活動についての紹介．約600字
2014/7/30	京都新聞	-	木津川1日探検（2014/8/10）の広報．約170字

木津川グループ河川レンジャー

団体情報
- 創設：2014年
- 主な活動場所：京都府京田辺市
- 主な活動：河川に関する普及啓発活動など
- 活動頻度：およそ月1～2回
- 連絡先：Facebookページ「木津川グループ河川レンジャー」からご連絡ください。

木津川グループ河川レンジャー（以下、木津川Gレンジャー）は、2014年度に発足した団体です。

河川レンジャー制度とは、国土交通省近畿地方整備局が設けた制度であり、淀川水系内の河川において住民と行政とが共に川づくりをしていくことを目標として作られました。河川レンジャーは河川の防災・歴史・自然に関する普及啓発活動や住民参加での美化活動などを行っており、その土地の歴史や自然を熟知した地元のシニア世代が担っている現状にあります。そんな中、木津川では、若さあふれる大学生に活動に関わって欲しいという河川レンジャーと、自然環境を通して地域連携活動に取り組みたいという学生の両者が意気投合し、大学生河川レンジャーが誕生しました。河川レンジャー制度としては初の試みになります。地元の河川レンジャーがアドバイザーとなり、大学生が活動の主体となり発足したのが木津川Gレンジャーです。

木津川Gレンジャーは互いに異なる専門分野を持つメンバーから構成され、木津川流域を舞台に、「遊び」を意識した生物採集や自然観察を行うだけではなく、「学び」を意識した環境教育イベントを実施しています。日頃、大学で外来魚を調査・研究しているメンバーは、外来魚が何を食べているかを体感してもらうために外来魚の解剖をイベントに取り込み、外来種が生態系に与える影響を伝えました。生態学の知識をもったメンバーは、昆虫採集とともに、一定面積内で採集できた生き物の個体数から河川敷全体の個体数を推定する方法を実践してみせました。

河川環境はその流域に住む人の命を守るために改修が行われ、維持管理に人の手が欠かせません。陸域の植物や昆虫、水域の魚などの生き物は、そのような環境下で複雑に関わり合って暮らしています。木津川Gレンジャーは地域の子どもたちに対し、自分の育つ地域の歴史や生き物を通じて、広い視野で自分の地域を見ることの大切さを伝えています。活動1年目を終え、参加した子どもたちからは木津川Gレンジャーを「憧れの対象」だという感想も得られ、今後の活動の広がりが期待されます。

写真提供：小林　慧人氏　13

図-3「生物多様性わかもの白書vol.1」p.13で紹介された

(2) 課題

大学生という立場にあり，学業との兼ね合いが難しかった．Gレンジャーの活動は自由意志で進んで行くため，学業の都合上，土日にフィールドに出る時間が取れず，活動を行えない期間もあった．明確な目標や好奇心がなければ続けていくことが困難だと考えることも多かった．

また，木津川に愛着を持ち自分なりの意見を持つにつれ活動への熱意は高まったが，その熱意を行動に移すために必要なRAと大学生との意思疎通が十分でなか

った．そして，知識や経験に自信を持てないことが障壁となった．怖いもの知らずとはいかず，思い切ったことになかなか取り組めなかった．例えば，この1年の間に木津川では新名神高速道路橋脚の建設，堤防強化工事，支川では天井川の切り下げが行われてきたが，これらの問題を子どもたちと考えるような活動を立案できなかった．これは大きな課題である．

上記のように，Gレンジャーという制度自体が新しく試行段階にある．そのため，木津川Gレンジャーは今後のGレンジャー制度の定着・拡散に向け，課題を洗い出し，整理し，発信する必要があった．しかし1年目を終え振り返ると，その部分まで考える余裕のないまま活動を進めていたといえる．つまり，現時点では課題も残るが，今後，他の河川でGレンジャーの模倣となるような活動立案・活動実施に発展していける団体を作ることができると分かった。

5. 今後への展望

大学生が木津川Gレンジャーとして活動し1年目を終え，木津川に愛着を持つという段階は乗り越えた．したがって次に行うべきことは，自分たちの活動を広く市民に認知していただくことである．Gレンジャーは子どもたちにとって将来の具体的な目標となることが実感できた．一方で，広報中に学校関係者と話をする機会があり，学校の授業内では授業時間数の関係から，自然環境学習に十分な時間を取らない学校も多いことが分かった．これらのことから，今後，より多くの子どもたちを呼び込めるように工夫した広報活動を計画し，木津川周辺の子どもたちの参加を増やし，木津川をはじめ，身近な自然環境への愛着を持ってもらうことで課題の克服としていきたい。

また，Gレンジャーはメンバーのほとんどが大学生であるため，数年で活動を終えてしまう．よって新たなメンバーを加えることが必要不可欠となる．今後，新たなメンバーを迎え入れる際，最初から自力で自然観察会を行えるかどうかの力量を基準とするのではなく，まずは木津川というフィールドや地域の人と活動することを通して木津川に親しむこと，このことが，木津川Gレンジャーの活動継続につながると考える．そして，現在活動に参加している子どもたちが大学生になった際に彼らにGレンジャーを引き継げるよう，Gレンジャーという制度を確固たるものにするための，将来を見据えた活動を展開していきたい．

専門性を高めることが求められる大学生という時期にGレンジャーの活動でそれを試す機会を持ち，参加者の子どもたちに河川での原体験の場を提供すると同時に，地域の人々との連携を深められた．大学生が地域に出て活動するという，この新しい制度，そして新しい取り組みの土台を作ることができた．この木津川Gレンジャーの取り組みが一つの契機となり，淀川水系内にとどまらず全国で，新しく発展的な取り組みが大学生によってなされることこそ，木津川Gレンジャーメンバーの願いである．

6. 謝辞

本論文を作成するにあたり、木津川Gレンジャー大学生メンバーの北野大輔氏には，文章内容や校正において大変お世話になった。ここに記して深く御礼申し上げる．